

# 王陽明の人生觀

高瀨武次郎

抑も一見單純なるが如くにして其實極めて複雑なるものは人生なり。人生の價値を評定することは性情の眞を知るよりも更に困難なり。凡そ人生の價値的見解に四種あり。曰く厭世觀、曰く厭世的進化觀、曰く復古的樂世觀是なり。厭世觀は人生を見て苦痛の數は快樂の數に勝り、人性は本來惡にして一般に生活は罪惡なるが故に世界及び人生を全く存せざるを可とすべきものとして厭忌するなり。略言すれば人は生れざるを可とするの見解なり。而して此哲學的意義より一變して第二の意義を生じ、單に眼前の社會の濁亂を厭忌するをも亦た厭世主義と稱するに至れり。蓋し眼前の社會を厭忌するの念も増進すれば、終に世界及び人生の存在を厭忌するに至るべければなり。

樂世觀とは世界は造物者が造り得べき中に就て最も善良なるものと信するなり。謂へらく世界は最上なり、何となれば若し最上ならずんば造物者は之を造らざりしならん。萬有神教及び萬有理教は凡て樂天的なり。此哲學的意義よりして第二の意義を生じ、眼前の娛樂肉體的快樂を恣にするを以て樂天主義の本領と解するものあれども、是れ恐くは非ならん。

進化的厭世觀とは人生は禍災邪惡を以て充たさるゝものとするなり。故に此見解に従ふときは厭世觀は勿論至當なるべけれども、全體に於て人生は日に月に善良なる目的に向ひつゝあれば、全體に關しては厭世の見解を可とすべきにあらず。

復古的樂世觀とは世界は無爲自然を以て成れるものなるが故に人生も亦た無爲を以て至善とするものなり。眼前の社會の綱紀紊亂し時人が罪惡を以て充たされたるを見て之を厭忌し太古の無爲敦朴の氣象に復歸して自然を樂まんとする者なり。

上述の四種の人生觀の中に於て最後の復古的樂世觀に就ては特に一考すべきものあり。陽明先生は道家哲學と聯關せる道教即ち神仙養生法に熱心なりし時期ありしなり。老子の思想は則ち復古的にして現在の社會を厭うて太古無爲の治世に溯らんとするものにして無爲社會を望む者なれば、老子の虛無恬澹主義を本とせる養生法は陽明先生が道士に就て學びし所にして多少の影響を蒙りたりと思はるゝなり。靜を以て可と爲し復古を旨とする者は泰西の文豪にも往々見る所なり。此の種の人は大抵物質文明の弊を惡み唯物論者の反動として起れるものなり。佛蘭西の「ルソウ」[Rousseau (1712-1778)] の如き則ち是なり。

彼は當時に流行せし宗教に反對して無神論、唯物論等を攻撃して三箇の事を主張せり。神の存在、意志の自由、靈魂の不死是なり。

彼は人類天然の有様は善良潔白なりしが、社會の發達に由て愈々惡習慣を養ひ不良の民と化し、世の進歩に従ひ、漸次罪惡増加せり。此惡習を改め、再び人類を善良潔白なる状態に回復するものは天然の状態に復歸する外、他に方法存するなしと論斷せり。是れ彼が當時の風俗の廢頹を嘆じて唱道せし説なり。彼の著に「エミール」Emileと云ふ教育小説あり。歴史家浦井鏗一郎先生は佛國大革命の遠因は「ルソウ」の思想も加はれりと云へり。

露國の文豪「トルストイ」Tolstoiも老子及び「ルソウ」に似たる思想を有せし人にして彼は老子を愛讀して之を露語に翻譯せんと企てしも完了せざりしと杜伯トルストイ言行録に見ゆ。杜伯の思想は老子に類似したる所あるならん。彼は其の當時の物質文明に反抗して自分は農夫生活までも試みて靜かなる社會を希望したるなり。老子や「ルソウ」の思想の天然無爲を喜ぶと相似たり。

陽明先生は道家思想の影響を蒙れることありしも一時的にして、三十五歳頃には全然孔孟思想に純なりしなり。然れども元來名利に恬澹なる天性なれば三十五歳以後漸次社會に活動するに至りし時も常に仙境に思を寄せ隱遁生活を憧憬するの迹は其の作れる詩に明かなり。

系圖上より見たる王子の思想——先生の年譜を見るに、陽明先生の遠祖は晉の光祿太夫王覽なり。其の曾孫は王羲之なり。王羲之は書道の聖人として知らるゝ人なるが、三十歳にて仕官を止めて隱遁的生活を爲し書道に専心したる人なり。山陰會稽に今日猶其の遺跡なる蘭亭あり。余は大正

二年の春之を訪へり。同道者十名許りなり。其の蘭亭は極て幽邃なる茂林脩竹の郷なれば風景好くして遁世に適せり。

其の子孫は餘姚城に移れり、其後王綱と云ふ人は明初に劉伯温に知れて廣東參議と爲り苗難に死す。其子王彥達は實に先生五世の祖にして祕湖漁隱と號す。高祖王與準は禮、易に精通し嘗て易微數千言を著はす。遁石翁と號して仕へず。祖王元叙は竹軒と號す。魏瀚嘗て傳を立て其の環堵蕭然雅歌豪吟胸次洒落を叙し、之を陶靖節、林和靖に方らぶ。父は王華、海日翁と稱す。嘗て書を龍泉山中に讀み、又龍山公と稱す。南京吏部尙書に至り進て新建伯に封せらる。龍山公常に山陰の山水の佳麗又先世の故居たりしを思ひ、復た姚より越城の光相坊に徙りて之に居る。

以上掲ぐる先祖の閱歷より考ふるも、王羲之を始めとして、一、名利に淡泊にして世塵を超脱すること、二、動もすれば隱遁生活に入らんとするの傾向あることが知らるゝなり。山水の勝景を愛するが如きは誰にも見らるゝ所なれども、遁世的傾向は既に幾分か厭世觀を抱く者と謂つべし。

上述は主として王氏の系統的遺傳的方面より陽明先生の人生觀の定まり來る原因を探求せし者なり。陽明先生の一代にも見らるゝが如く、先祖の人々も遁世に終はる人のみにはあらず。大いに社會に活動せし人もありたり。但名利に恬澹なりしは共通なる點と見るべからん。又陽明先生には極て快活なる性質を認むべし。少年頃に豪邁不羈と評せられ、又任俠を好むと云ふ氣風あり、又諧謔

を好み和易を好みし時期ありしを考ふれば、決して沈鬱憂懣に陥り了る人ならざりしを見るべし。故に陽明先生は佛教や老子の思想に熱心なりし時ありしも厭世に終るべしとは見えざるなり。稍之と異なる人を舉げて對比せんに、例せば獨逸の哲學者「ショーペンハウエル」Schopenhauer (1788-1860) の如きは其の性質が既に偏僻にして憂鬱的なるが故に厭世に傾き易く、且つ又氏が印度哲學書を愛讀して其の影響を受けしが如きも、元來の性質が厭世なるが故に、厭世思想を含める印度思想が最も容易に受け納れられたるならん。是れは元來の性質と境遇と學説とが一致して厭世的哲學者と爲りたる例なり。概論すれば「ショーペンハウエル」は哲學者としての才智豊富にして高名なるも人物は高潔ならず、人格者として仰ぐべき點は見えざるなり。

却説、陽明先生が厭世に傾かんとする形迹ありしことは年譜に據るに次の文あり。

陽明先生二十七歲。先生自念。辭章藝能不足。以通至道。求師友于天下。又不數遇。心持惶惑。(中略)沈鬱既久。舊疾復作。益委聖賢有分。偶聞道士談養生。遂有遺世入山之意。

此文に據るも先生は此世を棄て山に入て仙人生活を營まんと欲せし時ありしを知るべし。

陽明先生三十一歲。築室陽明洞中。行導引術。久之遂先知。已而靜久思離世遠去。惟祖母岑與龍山公在。念因循未決。久之又忽悟曰。此念生於孩提。此念可去。是斷滅種性矣。明年遂移疾錢塘西湖。復思用世。

此文にも世を離れて遠く去らんとする厭世觀を示せり。

## 第一、世 相 觀

次に陽明先生の拔本塞源論に先生の世相觀を示せり。此の一篇は非常の名文と稱せらる。(傳習錄 中卷に在り)、第一の世相は黃金時即ち理想的社會の狀況を示せり、唐虞三代の治世を指す。

此時代の聖賢は天地萬物一體之仁を以て世の爲に盡したるなり。古來儒者が理想社會として追慕する所にして、陽明先生の希望も此所にあるなり。理想的社會を古代に想像するは亦已むを得ざる所なるべし。時間的に古代を追慕せずして未來の世界又は外國に模範的社會を求むるも可なれども、支那古代には只自國のみを知るが故に他に求めず。我國の現状は歐米を先進文明國として理想郷を歐米に取れり、是れ又一方法なり。

堯舜三代の治世既に去つて覇者時代來れり。是れ一段の劣等なる時代なりとす。全體の物質的文明より考ふれば世界の文化は漸次備はりつゝあること明かなるも、精神的道德的に見れば漸次劣りつゝありとせるなり。聖人の學は王道時代に全盛なりしが、世と共に衰へたりと見られしなり。末世澆漓と曰ふ言葉も參考すべからん。

## 第二、霸道（春秋時代を指す）

霸者時代即ち齊桓公、晋文公、秦穆公、宋襄公、楚莊王は五霸と稱して春秋時代の旗頭たりしなり。此時代は王道の行はれたる時代に比すれば稍々劣等と爲れり。即ち五伯功利と云ふものにして只功利主義より打算して政治を爲し、眞の徳治政治にはあらず。孟子の書中にも王霸の比較論は屢々見えたり。伯道の政治を代表する書籍は管子と云ふものあり。齊桓公を輔佐して四十年間大政治家として手腕を振ひ、伯業を成さしめたる人の作と稱せらる。但し後人の加筆も多けれども思想のみより言へば伯者の思想を明示せること疑ひなし。晏子春秋は晏平仲が齊景公の臣として政治を爲したる時代の事及び種々行事を記せり。此時代は約三百年間なりとす。即ち周平王東遷より戰國時代に至る間なり、春秋衰亂の世と稱す。

戰國時代には學問界にも多數偉人出でて學説を發表したるも、是れ全く衰亂の世、攻伐の社會を救はんが爲にして、治世にはあらず。老子は其社會を厭うて復古的虛無恬澹の説を爲し、孔子は仁を説きて不仁の人を救はんとしたるなり。斯かる状態にて聖賢の努力の著しきは却つて世の衰頹を證することなれり。況や特に此時代を戰國時代とさへ稱したるをや。

## 第三、漢唐訓詁時代

漢唐の間は訓詁、詞章、記誦の學盛なりき。聖學明からず。朱子の所謂「漢唐諸儒只是說夢」といふものなり。思想界には種々なる説起りて人々適從する所を知らず。

佛老も亦漢唐間に人心を支配するに至れり。老莊學派も漢代よりは宗教と爲りて哲學以外に勢力を占めたり。斯くして支那の思想は漸次駁雜と爲れり。

宋明時代に至りては思想は愈々精緻と爲り、從來に見ざりし深遠なる支那哲學勃興したり。陽明先生は明代の中葉に出でて宋學の弊を攻撃しつゝ自家の哲學を立てたるなり。

## 第四、結 論

抑も儒教は本來樂天主義なれば孔孟の如きは寧ろ終世輓軻不遇なりしと雖も、一日も社會改善を忘るることなく、常に社會を見て漸次改善し得べきものと信じ、未だ曾て獨善自守の念を懷かざりき。是れ蓋し人生の真相を看破したればならん。請ふ次に之を陽明に就て攻究せしめよ。

夫れ陽明は其の閱歷に徴するに一たびは厭世家と爲らんと欲したれども、幸にして樂天家として社會に活動するに至れり。一たびは宗教家と爲らんと欲したれども遂に道德家政治家軍人として偉



功を奏するに至れり。然れば迷溺せる時期の陽明は厭世家にして、省悟せる時期の陽明は樂天家なりしなり。且つ陽明が人間最終の目的に就て懷抱せし所の意見を推究するに、陽明は人をして聖人の教に隨ひ、人の道を全くし、人の性を盡くし、天を知り、以て天人合一に至るを以て最終の目的と定められたり。換言すれば人は人たる所以の道を全くして遺憾なきに至らしむるを以て最終の目的と爲し、其より以上は一も望む所なきなり。或宗教の如く人をして人たらしむるよりも、寧ろ人以上の物たらしむるを以て目的とするものに非ず。陽明は毎に致良知は人欲を去つて天理を存するの謂なりと爲す。

又た天人合一を説けども、所謂合一とは人間を離脱して一層高尚なる天に合せよと曰ふに非ずして、人の聖境に達する者は能く天徳に合し得べしとするのみ。故に陽明は立志の最終の目的として聖人と作ることを説けり。然れば此の世界を汚濁として、外に清淨なる世界を求むるに非ず。此の體軀を厭うて他の神靈界に入るに非ず。此世界こそ眞に人の生れて活動し、且つ死すべき樂土なれ。他には此より善美なる樂土あることなし。此世を去つて他に樂土を求めよと説くは、迷溺せる煩悶者の哀訴なり。而かも此哀訴は遂に可かるることなかるべし。何となれば之を可くべき者何れの所にも存せざればなり。此の軀を棄て、他に樂しき體軀を得んと欲するものは、一時の苦痛に堪へずして、長く逝かんとする迷妄者の冥行なり。而かも此の身を棄て、他に樂しき體軀を得ること

あるなし。此の世界は美なるものなれども亦た醜なるものなきに非ず。樂しきものなれども亦た苦しきことなきに非ず。笑ふべきことあれど、亦た泣くべきことなきに非ず。猶ほ天候に晴雨寒暖の變あるが如し。陽明が宇宙を觀るは極めて穩健なるものあり。嘗て誠より之を説きて曰く、

夫天地之道誠焉而已耳。聖人之學誠焉而已耳。誠故不息、故久、故徵、故悠遠、故博厚。是故天惟誠也。故常清。地惟誠也。故常寧。日月惟誠也。故常明。(全書卷二十四、三丁、南岡兌)

と。是れ誠は天地を維持する者にして瞬時も無かるべからざることを明示せるなり。此の思想は子思の中庸に示せる誠の説より來れるものならん。而して之を人事に就ては復た、

誠之無所爲也。誠之不容已也。誠之不可掩也。君子之學亦何以異於是。是故以事其親則誠孝爾矣。以事其兄則誠弟爾矣。以事其君則誠忠爾矣。以交其友則誠信爾矣。是故蘊之爲德行矣。措之爲事業矣。發之爲文章矣。是故言而民莫不信矣。行而民莫不悅矣。動而民莫不化矣。是何也。一誠之所發、而非可以聲音笑貌、幸而致之也。故曰。誠者天之道也。思誠者人之道也。(同上)

陽明は既に天道を以て誠と爲し、地道を以て誠と爲し、而して又た茲に人道を以て誠と爲す。嗚呼誠は眞に天地人三才を一貫するの道なる哉。

抑も人は誠を爲さざるべからざるものにして、天然に誠を爲し得べき徳性を具ふるものなり。何

となれば人は天の生する所のものにして天の道は誠なり。誠は眞實無妄の謂なり。斯の天より生を受けたる人なるが故に、誠を失はざるべきは理の當に然るべき所なり。誠は宇宙の本體にして萬物は此の本體より出でたる現象なれば、人心は能く誠の本體に合し得べきものなり。蓋し陽明は子思と同じく誠を以て宇宙の原則と爲し、又た此原則を以て倫理的原則の根柢と爲せるが故に、誠は眞に以て天地人三才を一貫することを示せるなり。既に誠なるものは宇宙の眞相にして、天は一毫の詐欺を容れざることを知るときは、人も亦た百行總て誠にして詐欺なからんことを勉めざるべからず。陽明は宇宙觀及び人生觀に於て誠を認めたるが故に、人生は穩健にして誠を爲し得べきものたることを説けり。既に穩健にして誠を爲し得べき世界なれば、我等は之を愛し、之を護つて社會の爲に盡し、以て各自の本務を全くすべし。豈に之を厭ひ之を棄て、他に求むべきものあらんや。樂天主義は眞正なる人生觀なり。厭世主義は寧ろ病的な人生觀なり。恰も病者は美味を嘗めて却て苦味を感じるが如し。蓋し病者の味覺既に惡熱の爲に侵害されたるに由るなり。食に苦甘なきに非ざるも、病者は甘味をも苦味と感ずるに至る。世に悲哀の事なきに非れども、厭世家は樂事をも悲觀するに至る。是れ豈に正當の判斷ならんや。笑ふべきに笑ひ、泣くべきに泣くは可なれども、笑ふべきに尙ほ泣かんとするは狂にあらずんば愚なり。

抑も大學の書は格致誠正修齊治平の道を示すものにして、政治道德の説具はらざる所なし。而し

て陽明は大學古本に序して、

大學之要誠意而已矣。誠意之功格物而已矣。誠意之極止至善而已矣。(全書卷七、二) 十三丁右

と説けり。所謂致良知の説も亦た誠を全くするの道に外ならずして、誠は即ち良知なり。唯だ指す所に由て其名を異にせるのみ。然れば則ち陽明の教は良知を致して誠を立て、人道を全くして天地の誠道に合するを以て最終の目的となすものなり。聖人とは至誠の人なり。神とは至誠を抽象的に想像したる靈物に外ならず。天人合一とは則ち天人の誠が融合して間隔なきに至れるを云へるのみ。故に衆徳の根柢は吾人の心中に在り。眞の神は人心に在り。天に神ありと見ゆるは心内の眞神の影子なり。影子の沓遠なるが故に卻て愈々貴きが如く感ずるなり。神たらんと欲する者は仰いで影子に祈らんよりは省みて我心に求めよ。聖人とは古人の特稱にあらずして全く我心に在り。王子の詩に「箇々人心有仲尼」と云ふ句あり。故に聖人たらんと欲する者は遠く求むるを止めて、唯だ我が心の良知を明かにせよ。樂土は彼に在らずして我心に在り。至上善は他に求めずして我心に求めよ。心外無理なり、心即理なり。吾人は空しく他に向てつつ渴望するを要せず一切の善は我心より起らん。孟子が「萬物皆備於我矣。」(盡心上篇)と曰ひ、陽明が龍場の大悟に於て「聖人之道吾性自足。向之求理於事物者誤也。」(全書卷三十二、十三丁年譜)と絶叫しせは寔に偶然ならざるなり。由是觀之、至誠なる眞我は世界中最も偉大にして最も神聖なるものなれば、人生の眞價を知らんと欲する者は、先づ眞我を知らざるべからず。眞我を知る者にして始めて穩健なる人生觀を爲すを得べきなり。